

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第10号—通巻第23号—)

投稿論文 2

山口重克

(東京大学名誉教授 yamshige32@yahoo.co.jp)

小幡道昭による山口批判へのリプライ

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』
2-10-2

http://www.unotheory.org/news_II_1

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail: contact@unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>

小幡道昭の2008年の宇野理論批判（小幡 [2008] 所載、小幡 [2012] に収録）に対して、以前私は、小幡の宇野批判には宇野説を「帝国主義段階＝資本主義の没落期」説であるとか「現代資本主義＝社会主義への過渡期」説であるとみる誤解釈が背景としてあるのではないかと思われた点を基調にした反批判を書いた（山口 [2010]）。小幡は、近著『マルクス経済学 方法論批判』（小幡 [2012]）の第九章「不純化と多様化」において、その私に対する反論と質問を書いている。本稿ではそれに答えるために、小幡の反論を検討しながら、宇野の過渡期説についての私の解釈、私の「資本主義の部分性」論と「資本主義の不純化と多様化」論、および私の金融資本論の方法の概要と段階論的類型論の方法の概要とを述べることにする。

私の「小幡道昭の宇野理論批判」（山口 [2010-1]）は、小幡の宇野批判には小幡の宇野に対する、とくに宇野の過渡期説に対する誤解釈が背景としてあるのではないかと思われた点を基調にしたものであった。

小幡は「宇野の世界観を信じる人々」（小幡 [2008] p77）というような言い方をして、いわゆる宇野派に対して、宇野理論を信仰の対象にしている信徒であるかのように揶揄しているが、私は別に宇野の信徒ではないし、宇野の言説はすべて真理であるとする宇野ファンダメンタリストでもない。それはこれまでの私の作品によっても明らかであろう。私の小幡への反批判は、単純に、批判は誤解、曲解にもとづいて行われるべきではないと考えて、その観点から私の宇野解釈を書いただけのものである。宇野段階論の私なりの継承の仕方を書いた部分（山口 [2010-1] p154）を除けば、特に積極的な論点を提示したのではない。その意味で余り生産的なものではないが、誤解は看過するわけにも行かなかった。これに対する小幡の反批判の基調も、誤解ではないことを主張することにあるようなので、重複をいとわず、その点を中心に検討することにする。これまた生産的なものにならないかも知れないが、リプライしないことによって、日本のマルクス経済学の進展に一定の役割を果たした宇野理論についての誤解がいっそう蔓延するかも知れないことを思うと黙過するわけにも行かないので、やむを得ない。

「一 崩壊と没落」の検討から始めよう。ここでは、まず、小幡が「宇野は…もし資本主義に限界があるとすれば、現実の資本主義が純粋な姿をとりえなくなるからだ」と主張した（小幡 [2008] p76）といているのを私が小幡の「誤読」だといった（山口 [2010-1] p146）点を取り上げられている。実は私にはこの小幡の文章は難解で、意味がよく分からなかった。しかし余り細かいことを問題にすると紙数を費やすだけで、本筋が不明確になると思って、つづいて述べたように、彼が別の論稿で宇野は、「純粋化の傾向が鈍化・逆転した資本主義の歴史的発展段階の出現は、資本主義が没落期に達したことを意味すると主張した。純粋化＝崩壊論に対する不純化＝没落論である」と述べていることと同義であると見ること

にしたのである。彼の先の文章の意味がよく分からなかったというのはどういうことかというのと、「…とすれば」と「…からだ」の関係がよく分からなかったのである。「現実の資本主義が純粋な姿を取りえなくなる」というのは「純粋化傾向の鈍化・逆転の出現」、ないし資本主義のいわゆる「不純化」のことであろう。資本主義に限界があるとすれば、資本主義が不純化するからだというのはどういう意味なのか。「資本主義に限界があるとして、それは資本主義が不純化するからである」と読むことにしても、やはり未だよく分からない。「資本主義に限界がある原因は資本主義の不純化にある」でもよく分からない。「不純化する点に資本主義の限界が現れている」と「主張」したと知っているのだとすれば、文章の意味自体は何とか分かる。しかし、そうだとすると、小幡が別の論稿で「[宇野は]純粋化の傾向が鈍化・逆転した資本主義の歴史的発展段階の出現は、資本主義が没落期に達したことを意味すると主張した。純粋化＝崩壊論に対する不純化＝没落論である」というように宇野の「主張」を解釈しているのと同義だと見る事が出来るだろう。大体こういう推論をしたのであった。このことを山口 [2010-1] でも縷々書けばよかったのかも知れない。その反省に立って、本稿では少しくどくどと議論を進めていくことにしよう。

ともかく、以上のような理由で、小幡は宇野の「主張」を、「限界」と「没落」と「崩壊」とを同義に論じているものと解釈していると推論したのであった。

要約しよう。小幡が宇野の主張として述べている資本主義の「限界」についての議論の解釈は、不純化＝限界論と定式化できるであろう。他方で小幡は、不純化＝没落論という解釈を述べている。したがって小幡は、限界＝没落と解釈していると類推したのである。 $A=B$ と $A=C$ から $B=C$ を推論するこの類推法は、等号の左右の外延の大きさの違いによっては妥当性のない場合もあろう。つまり、厳密には「 \subset 」などの記号を用いるべきところを便宜的に「 $=$ 」を代用しているような場合は、この類推は真ではない場合もあろうが、小幡の上記の言説についての類推は、大方の承認をえられるだろうし、小幡も承認しているようである。「不純化＝資本主義の限界」説という宇野解釈を「〈誤読〉と片付けるのは無茶」（小幡 [2012] p244）だということであるから、小幡にあっては没落と限界が同義とされているとみた私の解釈は正解だったということになるが、そこで問題は、それでは別の論稿での「不純化＝没落論」を主張したという小幡の宇野解釈も誤読ではないというのか。あるいは、後のことになるが、宇野が「過渡期論」をとっているという解釈も誤読ではないというのか、に転回することになる。

この問題の検討に進む前に、小幡が私の片付け方は「無茶」だといったあと、私が小幡の宇野解釈を「〈誤読〉と難詰せざるをえなかったのには、もう少し深いわけがありそうである」といって、それは、私が、「〈限界〉を〈没落〉と解釈し、さらにこの〈没落〉を〈崩壊〉と同義とみているためではないかと思われる」（同上、p245）といていることに一言しておきたい。

これもよく分からない言い草である。上述のように、私は小幡が「限界」と「没落」、

「崩壊」を同義と見て宇野の不純化論を批判していることを「難詰」したが、どうしてそのことから、私がこの三者を同義と見ているという推論を導き出せるのか、不可解である。いうまでもなく私自身が同義と見ているわけではない。もっとも没落（死滅あるいは消滅という訳語が当てられる場合もある）と崩壊の方は、とくに区別する意味がよく分からないので、同義と見ていると解釈されてもよいが、「限界」という用語については区別をしているつもりである。小幡も執筆している菅原陽心の編著書〔2011〕で、例えば、「市場経済の経済システムとしての限界を示す」いくつかの事情をあげたあとで、「もちろんこうした限界があるからといって、だから市場経済世界はやがて終末を迎えるだろうとか没落するだろうということを主張しようというわけではない。没落のためには運動主体の存在が不可欠である」（山口〔2011〕、116頁）と述べたことがあることから、同義に見ていないことは明らかであろう。これは私が宇野から学んだ理屈であり、だから宇野も「限界」を「没落」や「崩壊」と同一視しているとは思えない。拙稿でわざわざこんな断り書きをしたのは、限界と没落と崩壊を同義に見ていると早とちりする人がいることを警戒したからである。

つづいて小幡が問題にするのは、私が「資本主義は今までその不純化＝多様化ゆえに、あるいは不純化＝多様化にもかかわらず、延命している。その意味であえて定式化していえば、宇野説は不純化＝延命論であろう」（山口〔2010-1〕p146）と述べた点である。

小幡はこれに対して、ほぼ次の3点で批判ないし疑問を述べている。すなわち、

(1) 「不純化＝多様化ゆえに」と「不純化＝多様化にもかかわらず」では「逆の意味になる」のに、この「反対のもの」を「あるいは」で結ぶのはおかしい。「ここは…真偽あるいは適否をはっきりさせるべきところであろう」（小幡〔2012〕p245~6）。

(2) 「不純化＝多様化」というのは「宇野の解釈なのか、それとも山口氏の自説なのか。この表現を「宇野のテキストのうちに思いうかべることができない。その典拠は山口氏に直に尋ねるほかない」（小幡〔2012〕p246）。

(3) 「不純化＝没落説」という類の記述は「いくらでも頭に浮かぶ」として、その一例としての宇野の文章をあげている。また、それにつづいて、宇野が「崩壊」と「没落」を区別しているようなことを述べている。

以下、それぞれについて私の感想を述べたい。

(1) について。まず、「不純化＝多様化ゆえに」と「不純化＝多様化にもかかわらず」という二つの「命題」は「逆の意味」の「命題」ではない。「不純化＝多様化」「しているが故に」と「していないが故に」とを「あるいは」で結んだのであればおかしいであろうが、私が書いているのは「不純化＝多様化」の影響ないし「延命」の原因がいずれにせよ、ということであり、影響論、原因論の追究を留保しただけのことである。「真偽」をはっきりさせろといわれても、私の関心はさしあたりそこにはなかった。宇野説においては、不純化と没落は同値ではないのではないかと、つまり「不純化＝没落論」という

宇野解釈はおかしいということがいいただけのことである。

例えば、大酒飲みの長寿の人に対して、彼が長寿なのは大酒飲みであるにもかかわらずというべきか、大酒飲みであるが故にというべきか、とか、ある人の言説に対して、彼がこんなことを言うのは、彼が秀才であるからというべきか、あるいは秀才であるにもかかわらずというべきか、というのと似た言い回しであると思って頂きたい。ちょっとしゃれたレトリックを使ったつもりだったが、そのように評価されなかったのは残念である。私の勝手な期待の甘さに対する繰り言はこの位にして、つづいてもう少しまじめなコメントをしておこう。

小幡が取り上げている上記の箇所（山口 [2010-1] p146）で私は、先にも引用したが、小幡の宇野に対する「不純化＝没落論」であるという解釈は誤解釈であり、「資本主義は今までその不純化＝多様化ゆえに、あるいは不純化＝多様化にもかかわらず、延命している。その意味であえて定式化していえば、宇野説は不純化＝延命論であろう」と述べた。

これに対して小幡は「不純化＝多様化」は「延命」にとって必要条件なのかと設問している。「限界」が事実についての理論認識であるように、「不純化＝多様化」も「延命」も事実についての認識である。この両者の事実の間に私は多分、前者が必要条件であろうという見当はつけているが、きちんと分析した上での結論ではないので、両者の因果関係については確言はできない。先に留保したといった所以であるが、ここで私からも、宇野理論について「不純化＝没落論」であると定式化している小幡に対して同じように、宇野は不純化を没落の必要条件であると考えていたと解釈しているのか問いたい。あるいは、不純化は必然的に没落に結果するという意味の定式化なのか。マルクスを「純粋化＝崩壊論」と定式化していること対比しているのであるから、そのような意味のものと推論できるが、そう解釈していると解釈してよいか、を問いたい。

そもそも「延命」は事実であるのに対して、「崩壊」ないし「没落」は事実ではない。予想（期待）である。この二つの等式の内容はねじれており、「不純化＝没落」と「不純化＝延命」は、並列的に対比できるものではない。そのうちの「不純化＝延命」は、不純化したから延命しているのかという因果関係はとりあえず留保するとしても、事実としての「資本主義の不純化」と「資本主義の延命」とはほぼ同値と捉えてもよい関係だろうと思う。不純化＝多様化は資本主義の柔構造化と言い換えることが出来るであろうが、柔構造の方が一元的な剛構造のものよりもしたたかであるといえるだろう（山口 [1992] p vi）から、その意味でも不純化＝延命化といってよいのではないか。宇野の理論は「不純化＝没落」論とは到底思えないが、それに対比して「あえて」いえば、宇野説は「不純化＝延命」論であろうと言ったのであった。「あえて（＝無理矢理、強引に）」といったのは、宇野がこのように言っていたわけではないからである。つまり、これは私の勝手な解釈による「定式化」であるが、この解釈は宇野を貶める解釈であるとは思っていない。

（2）私の「不純化＝多様化」というのは宇野の解釈なのか、それとも私の「自説」な

のかという設問について。もちろん私の宇野解釈である。その限りでは私の説といえるかも知れないが、私は、「自説」というのは、何か知的所有権を主張しているようで、余り好きな言葉ではない。

宇野が、1870年代以降、資本主義の純粋化傾向が鈍化ないし逆転し、新しい型の資本主義が出現した点で、それ以前とそれ以後の資本主義の発展段階を区別したことは確認するまでもないであろう。それ以前のいわゆる重商主義段階と自由主義段階の発展過程は「純粋化」過程、以後のいわゆる帝国主義段階の発展過程は一般に「不純化」過程と呼ばれるが、これは宇野の用語法による。この不純化過程は新しい型の資本主義を展開した点で、資本主義が段階的な多様性を展開した過程であるが、その段階的發展と同時に併行して資本主義の「諸相」(ドイツ型・イギリス型・アメリカ型)が展開された過程でもあった。これも確認する必要のない周知の事実であろう。このような発展段階的類型と「諸相」(宇野の用語)ないし空間的諸類型の展開に対して、私は両者を含めて「多様化」という用語を使ったが、これは宇野の用語にはない。小幡は、「多様化=没落」とはいい難いから、「不純化=多様化」という表現が気になるのであろうか。

小幡は、自身が「歴史的な〈傾向〉を重視」しているのに対し、私は「資本主義の共時的な多様性に関心をむける」(小幡 [2012] p250)、あるいは「両者の違いは、純化傾向の鈍化・逆転という不純化の〈傾向〉を重視する小幡に対して、山口氏が不純化を多様化と捉え、現実の資本主義はつねに不純で多様だというように、空間的な差異を強調するところにある」(小幡 [2012] p248)といている。私がヨコの多様性に関心があり、それを重視していることは確かであるが、むしろ、だからといっていわばタテの段階的多様性を軽視しているわけではない。私が強調したいのは、資本主義の段階的変容は同時に資本主義の地域的多様化を伴って進行したということであり、私はこのことを宇野から学んだ。

宇野について私は次のように言ったことがある「帝国主義段階論では、資本主義は多様化していくものとして捉えられており、ドイツ型、イギリス型、アメリカ型という三つの蓄積様式が抽出される。ここではいわば単線的発展史観とは異なる複線的発展史観が提起されているわけであり、段階論と名付けられてはいるが、歴史的なタテの類型論だけでなく、空間的なヨコの類型論が同時に論じられることになっているとあってよい」(山口 [2006] p7)と。

私が「不純化=多様化」という表現を使ったのは、1970~80年頃から、「資本主義の多様性」についての議論が盛行したことの影響による(同上書の序章第1節の他に、山口 [2008] p15~17も参照されたい)。したがって宇野からの直接の出典によるものではないが、宇野が事実上、資本主義の発展段階論という多様化論、あるいは不純化過程としてのいわゆる帝国主義段階で諸相論という多様化論を述べていることから学んでいる点では、多様化論は宇野説であるといってもよいであろう。

私は、社会科学においては独自の説という意味での「自説」などというものはないと思

っている。多かれ少なかれ、すべて先学から継承した考えの混合物であって、厳密な意味でのオリジナリティなどというものはないのではないだろうか。混合の仕方に多少の工夫があるだけであろう。

(3) 小幡が「いくらでも頭に浮かぶ」「不純化＝没落説」という「類の記述」の一例としてあげている(小幡 [2012] p246) 宇野の文章は、要点を抜粋すれば「資本主義の発展段階は、いわゆる発生、発展、没落の各時期を画するものであることを明らかにしてくる…。段階論も…資本主義の発生、発展に対して没落期を明らかにすることはできる」というものであるが、これは宇野の『社会科学の根本問題』(1966年)に収録されている「経済学における原理論と段階論」(『思想』1960年所載)の文章である。

宇野の「過渡期説」を問題にする時にもう一度取り上げるが、私は、宇野の段階論の考え方は1953年の『経済政策論』と1971年の『経済政策論 改訂版』との間のどこかの時点で変更されていると考えている。そのような解釈に立って、小幡が上記『改訂版』を典拠にして宇野が「過渡期説」をとっていたと解釈していることに疑義を提示したのであったが、これと同じ理由で、いわゆる帝国主義段階について宇野が仮に没落期説、つまり「不純化＝没落説」をとっていたとしても、それは『改訂版』以前のこと、つまり1971年以前のことだというのが私の宇野解釈である。53年の旧版(いわば前期宇野段階論)でも宇野は、第3編「帝国主義」の第1章を「爛熟期の資本主義」と規定していたが、「序」には「所謂没落期」という表現も見られた。そこには資本主義の「変化・発展の法則」に対するカウフマン＝マルクスないしレーニン流の「弁証法的」三段階規定(『資本論』第1巻第2版後書き、レーニン『カール・マルクス』)への配慮が残っていたと見られる。だから、1960年の著作に帝国主義段階＝没落期と考えていたと見られる表現があるとしても、不思議はない。1953年はいわば革命前夜の時期である。このような時期に述べられたのが没落期説ないし過渡期説であり、それはその後の資本主義の展開状況と社会主義の状況を目にして、『改訂版』の少し前頃から放棄されていたと見てよいのではなかろうか。

このことの参考の一つとして、1958年の段階論をめぐる研究会における宇野の発言を紹介しよう。「発生・発展・消滅」といふときの発生とか消滅とかいうのは、大抵予想をつけて使っているのです。爛熟期という妙な言葉を使っているのです。それはそれで意味があるので、資本主義が単に没落するとか消滅するとかではなく、発展するということを表したかったのです。没落とか消滅とかいってしまうと、なんだか消滅の面が強くなって来るが、やはり資本主義は発展するのだ。発展しつつも自由主義の時代のように純粋な資本主義社会にいくという発展の仕方じゃない。そういう意味では資本主義の爛熟という言葉も、これは東北大学で講義した時から使っている言葉なのですけれども、苦肉の措置かも知れないが、没落とか消滅とかいふと言い過ぎになるために、ある程度こういうことも出てくるのです。…」(桜井毅他 [2010] p254)。ここには1958年にすでに、以前から不純化した資本主義を「没落期」と捉える考え方に違和感を持っていたことが述べられている。

また、宇野が『改訂版』の「結語」の中の「段階論」を解説している文章でも「それぞれの国の経済がそれぞれに独特の歴史をもちながら、資本主義経済を採り入れるとき、資本主義の世界史的発展段階の異なるに従って、その発生、発展の過程は著しく異なることになる」(宇野 [1971] p260) といつて、「没落」を落としている。これも参考の一つにはなるだろう。ついでながら、この文章は、宇野段階論を複線的発展史観によるものと見る、先に述べた私の宇野段階論解釈の参考の一つにもなりうるだろう。

ともかく宇野も、資本主義の3段階をカウフマン＝マルクス流のいわゆる発生・発展・消滅の「弁証法的」三段階規定に照応させていた時期があったことは確かであるが、しかし、『改訂版』前後からはこの照応への無用な配慮は捨てられていたというのが私の解釈である。これは、宇野のいわゆる過渡期説は『改訂版』以降放棄されているという解釈と類似の問題である。この解釈とその典拠については、「宇野 30」の「ニュース・レター第Ⅱ期第2号」所収の「宇野弘蔵の〈過渡期〉説について」(山口[2010-2]) で書いたが、あとでもう一度論じる。

「二 資本主義の部分性」に移ろう。

小幡はまず「帝国主義段階の核心」を「非市場的な要因の果たす役割の増大」と「資本主義諸国の部分的な発展」という「二重の現象」に求める。そして、この現象の基調は第二次大戦後まで持続したといつていいという。しかし、このように「帝国主義段階の拡張を受け容れたとしてもなお、20世紀末に顕在化した新たな資本主義諸国の台頭は、生成・発展・没落という3段階論の枠組みに収まらない」(同上書、p249) というわけである。

そして、つづけて拙稿「小幡道昭の宇野理論批判」で提起した小幡への疑問(山口 [2010-1] p151~2) に反論する。煩をいとわず、まず、私が疑問に思った小幡の文章と、それに対する私の疑問の主要部分とを下に掲げておこう。

小幡の文章：「全世界がすべて資本主義になることはない、帝国主義は資本主義の部分性を具現する、20世紀末までのこの主張はたしかに妥当性を有したのである。しかし、世紀末以降のグローバリズムは、状況を一変させた。…生じた事態は帝国主義の〈部分性〉命題に対する世界史的転換であった。対内的には福祉国家政策によって階級的・階層的対立を調整する体制が新自由主義に変質する一方で、新興経済圏の台頭によって対外的な資本主義の部分性の転換が顕わになったのである」(小幡 [2008] p80~81)。

私は、この小幡の主張を「〈全世界がすべて資本主義になることはない〉というこの〈資本主義の部分性〉認識は二〇世紀末までは〈たしかに妥当性を有した〉が、世紀末以降〈生じた事態は帝国主義の〈部分性〉命題に対する世界史的転換であった〉」といつていと要約(山口 [2010-1] p151) し、「ここで〈資本主義の全世界化〉という楽天的な信仰の論拠として小幡があげている〈新興経済圏の台頭〉がはたして〈全世界がすべて資本主義になる〉ことを保障する事態なのだろうかという点」に疑問を提起した(同 p152)。

これに対して小幡は「山口氏はわざわざ括弧を付して〈資本主義の全世界化〉〈全世界がすべて資本主義になる〉と記しているが、筆者〔小幡のこと〕は小幡の論考のうちにこの文言の有無を審らかにしえなかった」といって、上記のような私の理解の仕方を「的を逸した読み方」（小幡〔2012〕 p250）であるという。

しかし、上に掲げた引用文から明らかなように、「全世界がすべて資本主義になることはない」という「資本主義の部分性」についての主張、つまり認識は、20世紀末以降妥当性を失った、グローバリズム以降帝国主義の部分性命題の世界史的転換があった、新興経済圏の台頭によって対外的な資本主義の部分性の転換が顕わになった、といているのであるから、反対解釈論を持ち出すまでもなく、小幡がグローバリズムによる資本主義の全世界化認識を提起していると推論するのは自然であろう。括弧をつけたのはもちろんこれが小幡の主張であることを示したかったからである。的を逸していたとは思わない。

なお、先に引用した小幡の主張に対して、私が「従来の資本主義世界の内外で資本主義がいわば逆流しているこの現況が、おそらく小幡のいいたい〈帝国主義的現象をこえた新たな状況〉、〈三段階論が予期しなかった新興経済圏の台頭という状況〉であり、これを説明するためには〈段階論の見直し〉〈問い直し〉が必要であるといいたいのであろう」といったのを小幡は「見当外れな付度」であるといい、この節の最後で、「〈純粹資本主義〉論から離脱した小幡には、〈逆流〉しようにも、もう戻る先はない。〈逆流する資本主義〉は伊藤誠氏がかねて持論とするところ、…」(小幡〔2012〕 p250～1)と述べている。「〈純粹資本主義〉論から離脱した小幡には」「戻る先」がないというのはどういう意味なのかよくわからない。小幡のいう「戻る先」というのは「純粹資本主義」のことなのであろうか。

ここでどうして突然、伊藤の持論の話が引き合いに出されるのかもよく分からないが、伊藤のいう「逆流」は「純粹資本主義への逆流」ではあるまい。そもそも純粹資本主義なるものは実存しない思考上の理念的な構築物である。実存しないものは逆流先にはなれない。実存したのは純粹化傾向であり、逆流傾向があるとしても、それは純粹化傾向への逆流であろう。

伊藤を引き合いに出したあと小幡は、「この際ぜひ山口氏による伊藤＝逆流仮説批判を期待したい」（小幡〔2012〕 p251）といている。私は小幡のいう「今日の資本主義」の「大地殻変動」（小幡〔2008〕 p78）論、あるいは「大転換」（小幡〔2008〕 p81）論と伊藤の「逆流」論との差異がよく分からない、つまり小幡説も逆流論、それも可成り過激な内外逆流論ではないかという気がするし、「逆流」と見ることで自体にそれほど違和感を持っていないので、小幡の期待には応えられない。

なお、ここで、資本主義の部分性についての私の考え方を述べておきたい。

資本主義市場経済の成立は、市場経済が伝統的な共同体による社会的生産に浸透し、人間の労働力を商品化することによってそれを解体して、新たな社会的生産の担い手になったことを意味する。しかし、市場経済が伝統社会を解体したといっても、従来の人間生活

を完全に解体し、人間と自然との物質代謝を全面的に市場経済化することはできなかった。何よりも資本主義生産存続の根本条件である人間労働力の商品化そのものが完全には行いえない。資本は人間労働力の追加供給を自由には行いえないし、その消費にあたっては、それに必要な人間の主体性の処理を自由には行いえない。人間行動に対する伝統的な文化による拘束を簡単には解除できず、時代、地域によって異なる人間による浸透拒否、抵抗を必ずしも排除しえないことから、多様化が必然化するのである。市場経済の人間生活にとっての部分性という限界が、市場経済の段階的、地域的多様性として現れていると見てよいであろう。別の言い方をすれば、市場経済の多様性は、人間生活にとっての部分性という限界を克服できない市場経済が、集団主義的人間と妥協し譲歩することによる変容の多様な仕方の現れだということができると私は考えている。この資本主義の部分性は、ネオリベラリズムの浸透によっても、内的にも対外的にも、小幡の見立てのように、簡単に「転換」（小幡 [2008] p81）出来るものではない点に、資本主義市場経済の限界があるのではないかと考えているのである。

「三 〈没落期〉と〈過渡期〉」に進もう。

この節の書き出しを小幡はまず、小幡の世代にとって「過渡期論」は「独自のリアリティを持った問題だった」という「昔語り」から始める。当時は反体制運動が高揚し、現代はまさに社会主義への過渡期世界であるという主張があちこちで叫ばれていたという。そして、こうした中で雑誌『情況』が宇野にインタビューし、宇野が「過渡期」について語った記事が引用される。この記事での宇野の発言の解釈については山口 [2010-2] で書いたことがあるが、この誤解釈問題はあとで再説することにし、とりあえず小幡の話のつづきを聞くことにしよう。小幡は、この宇野の「発言を聞いて育った小幡の世代」に、「宇野が「ロシア革命後＝社会主義への過渡期」論を主張したというのは誤読によるものだと山口が「今さら論してみても詮無いこと、40年遅い」「40年たってこんどは〈言っていない〉ですか、これは正直シラけましたね」と「苦笑」したというのである（小幡 [2012] p253）。

最後の「こんどは〈言っていない〉ですか」という文章の意味がよく分からない。「こんどは」というのだから、以前は、おそらく40年前は、「言っていた」といいたいのだろうが、これは誰の話で、何を言ったとか言わないとか言っているのかがよく分からない。そもそも小幡は、宇野が過渡期説を主張したというよく流布されている宇野解釈を自身はどう思っていたのか、またどう思っているのか、がはっきりと述べられていない。「小幡の世代」といういい方をしているが、小幡自身はどうだったのか。当時の「学友諸君」に違和感を持っていたような言い方もしている（同上）し、宇野が過渡期説を主張したという解釈は誤読によるものだという私の解釈に対して、「今さら詮無いこと、40年遅い」といっていることから察するに、いま現在は私の誤解釈説を承認しているようにも聞こえるが、

そう思っているのか。

そうだとしたら、何時から承認することになったのか。小幡 [2008] での宇野批判の時は未だ承認していなかったはずである（証拠は後述）。たしかに早い遅いは大事なことのひとつかも知れない。しかし、遅きに過ぎるにせよ、今さらにせよ、その私の指摘が正しいと思っているのか、思っていないのかも大事なことのように思う。「今さら」といってはぐらかすだけで済む問題ではないのではないか

小幡は先の「苦笑」のあと、まず、宇野同様、小幡も第2次大戦後の資本主義の発展を新たな発展段階を画するものとは考えていない（小幡 [2012] p253）といい、つづけて、小幡が宇野批判 [2008] p80 で「既存の三段階論をそのままにして、第四段階を継ぎ足そうというのはいかにも安易にすぎる」といったのはその意味だったというような言い方をしているが、私がこの文章を読んだ時の印象は、宇野派の誰か、たとえば「大内力の国家独占資本主義論」ないし大内系の人たちの論説を念頭においた発言であろうと思い、「宇野はこの国家独占資本主義論には否定的であったし、継ぎ足し論も考えてはいなかった」（山口 [2010-1] p152）ことをいったのであった。その論考での私の主題は宇野解釈だったからである。小幡はこれにたいして、私が「トボけて見せ」（小幡 [2012] p253）ているという。何を何のためにとぼげなければならないのか、これも私には全く意味がわからない。

そのあと小幡は、「いずれにせよ、〈世界史的には社会主義への過渡期に入った〉という小幡の〈補記〉解釈は、〈第2次大戦後の資本主義の発展は新たな発展段階を画するものとはいえない〉という山口氏の解釈と矛盾するものではない」（同上 p254）といい、宇野が「世界史的に〈過渡期に入った〉だけで、資本主義自体に過渡期という第4段階があるといっているわけではない」（同上）ことは先刻承知しているかのようにいう。そしてつづけて、「小幡のどこをどう読めば〈過渡期の資本主義〉といっていることになるのか、残念ながら筆者にはわからない」（同上）という。しかし、私は「新たな発展段階」という言葉を「過渡期」という意味で使っているわけではない。

この引用文の前半は論点が微妙にずらされている。小幡は自分の「補記」解釈を私の「補記」解釈と対比して、「矛盾するものではない」といっているが、その場合の私の「補記」解釈として挙げられているのは「第2次大戦後の資本主義の発展は新たな発展段階を画するものとはいえない」という点だけであり、「過渡期」問題が「新たな発展段階」問題にすり替えられている。私が問題にしているのは宇野が「補記」で「過渡期説」を述べているかどうかであり、小幡は宇野が「補記」で「過渡期説」を述べていると解釈している点を問題にしているのである。

後半の「小幡のどこをどう読めば〈過渡期の資本主義〉といっていることになるのか、残念ながら筆者にはわからない」といっていることに対しては、たとえば、次の個所を挙げることが出来よう。すなわち、小幡は宇野の段階論を解説して、「世界史的に見ると、すでに社会主義への過渡期に入っていると見るべきだというのである」（小幡 [2008] p84）

といい、さらにそれに註記して、「宇野はこの判断を当初ためらっていたが、第二次大戦後、過渡期説を積極化させた」(同上、p99、注10)といているところがそれである。但し、「第二次大戦後」のあとの「、」の意味がよくわからないので、「=」位の意味かなと解釈した。「当初ためらっていたが」というのは何をもちってそう言うのか、前掲インタビュー記事で編集部が、どうして「断定しなかったのか」と質問したことに対応するのかもしれないが、ともかく「補記」で「積極化」したというのである。

なお先に、小幡の世代の多くが「過渡期説」と解釈した典拠として、小幡がインタビュー記事を挙げていることを紹介したが、この記事での宇野の発言を過渡期説と読むこと自体に問題があることをここで改めて述べておきたい。これは先にも述べたように山口 [2010-2] で書いたことであり、繰り返しになるが、このニュース・レターは余り読まれていないような気がするので、ここで要旨を、しかし少し詳しく、述べておきたい。

宇野が「第一次大戦後＝社会主義への過渡期」説を主張したという宇野解釈が広く行われるようになったのには、宇野の『経済政策論 改訂版』(1971年、弘文堂)の巻末の「補記」の読み方に一因があるように思われる。私の理解では、第一次大戦後について、宇野は旧版では社会主義への過渡期説に傾いていたが、改訂版でその考え方を放棄したと思われるのであるが、一般にはむしろ改訂版で宇野は過渡期説を明確にした、あるいは積極化したと解釈されているようである。本稿でこの解釈が間違っていることを検証したい。

この改訂版出版直後に行われた『情況』編集部によるインタビューでの宇野の発言(『情況』1971年5月号、所載、『資本論に学ぶ』1975年、東京大学出版会、に再録。178頁以下)の中に、先の解釈に影響を与えたかもしれないと思われるものがその第3部にある。このインタビューは3部に分かれていて、編集部がつけたと思われるその表題が「過渡期としての世界と現状分析」となっているのも、この解釈を助けたかもしれないという推測もできるが、まず、この問題に関連があると思われるインタビューでの編集部の質問と宇野の回答を以下に引用する。微妙な問題があるので、少し長くなるが、両方とも全文を掲げることにする。

編集部の質問は、「こんど先生は『経済政策論』の改訂版をお出しになったわけですが、新しく補記を加えられ、その補記の中で、第一次大戦以降の〈資本主義の発展が段階論的規定をなすのに如何なる程度にまで役立てられるかは極めて興味ある、重要な問題であるが、疑問として残しておきたい〉という注をはずして、〈むしろ現状分析としての世界経済論の課題をなす〉とされていますが、いままで断定をためらっておられた理由はどういうことですか」(同上書、179頁)というものである。

これに対して宇野は、「その理由というのは、現在の植民地解放と、それから社会主義国が沢山できて、それが資本主義国と戦争をするということにまでなってきたという事実によるのです。ここまでくれば、これはもう資本主義の時代といえないのではないか、つまり段

階論として区別しなければならないような問題じゃないんじゃないかということです」（同上頁）と回答している。

その回答に、編集部がさらに「そのところをもう少し説明して下さい」と質問したのに対し、「段階論ではないということだよ。つまり、過渡期に段階論があるかな」（同上）と続けている。

このやりとりを普通に読めば、編集部は1954年版の『経済政策論』の巻末「結語」の注で、宇野が「第一次大戦以降の資本主義の発展が段階論的規定をなすのに如何なる程度にまで役立てられるか」という問題を「疑問として残した」、つまりいままで断定をためらってきたのはどうしてかを聞いているのであるから、宇野がインタビューでその「理由」として答えているのは、第一次大戦以降の資本主義の発展は段階論的規定に役立てられるのかどうかという問題を旧版の時点では「疑問として残した」理由、いかえれば、新たな段階論的規定には役立てられないかもしれないと考えた理由であると解釈できよう。つまり旧版の時点では、宇野はそこで述べられている植民地解放とか社会主義諸国云々という事実から、第一次大戦後はもはや資本主義の時代とはいえないかもしれない、したがって資本主義の新しい段階と規定することはできないかもしれないと思っていたといっているわけである。

要するに、これらから解釈できることは、宇野は、54年版の時点では第一次大戦後の資本主義は新しい段階論の対象にはならないのではないかと、むしろ社会主義への過渡期として、現状分析としての世界経済論の対象をなすのではないかと考えていたということである。

しかし、一般には、宇野がこのように考えるようになったのは1971年の改訂版以降だと解釈されているように思われる。あるいは改訂版の時点で、旧版の注の考え方が改めて確認されたと解釈されているのかもしれない。

こうして問題は、改訂版の時点でも、旧版の注で述べられていたような考えが残っているのか、あるいは改訂版では旧版の「疑問」は解消されていて、過渡期論は放棄されているのか、ということになる。

そこで、一般に宇野の「第一次大戦後＝過渡期」説なるものの出典であると理解されているように思われる改訂版の「補記—第一次世界大戦後の資本主義の発展について」（同上書、263頁～）の冒頭部分を以下に引用して、検討することにしよう。

「旧版では〈結語〉の中の〈段階論はしかし資本主義の発展の歴史そのものではない〉という一句に次のような註をつけていた。すなわち、〈本書は見られる通りその対象の範囲を第一次大戦までの資本主義の発展段階に限定している。その後の資本主義の発展が段階的規定をなすのに如何なる程度にまで役立てられるかは極めて興味ある、重要な問題であるが、疑問として残しておきたい。1917年のロシア革命後の世界経済の研究は、資本主義の典型的発展段階の規定を与える段階論よりも、むしろ現状分析としての世界経済論の課

題ではないかとも考えられるのである。)と。しかし、この改訂版ではこの註記を削除した。これは当時なお私には段階論としての経済政策論に曖昧なる考えが残っていたのである。事実、第二次世界大戦はもはや単なる帝国主義戦争とってよいか、どうか迷っていたし、その後のアジア・アフリカの旧来の植民地の独立、中国・北朝鮮・東欧諸国等における社会主義政権がどういう発展を示すか、ということにも、またソ連における社会主義経済の建設にどういう成果が見られるのか、というようなことにも全く知識を持っていない私にとっては、何とも確言できなかったからである。しかしその後の資本主義諸国の発展は顕著なるものを見せながら、それはこれらの社会主義諸国の建設を阻止するものではなかったようであり、しかもその発展に新たな段階を画するものがあるとはいえないのである。結局、段階論としての政策論に新たな展開を規定することはできないのであって、〈その対象範の囲を…〉の〈限定〉は不必要のことであった。〈むしろ現状分析としての世界経済論の課題〉をなすものとしてよかったと思う。」(同書、263～264頁)

ここの「確言できなかったからである」に続く「しかし」以下の文章をどう読むかであるが、文章の流れからいうと、旧版当時は段階論としての政策論について曖昧な考えが残っていた、あるいは迷いがあった、とってその理由を述べたあと、「しかし」といつているのであるから、「その後の資本主義の発展」をみて、迷いが吹っ切れて、「その発展に新たな段階を画するものがあるとはいえない」、「段階論としての政策論に新たな展開を規定することはできない」、したがって従来の段階論の「対象の範囲」を大戦前に「限定」する必要はないという結論に達し、新しい段階として規定することを止めた、というように読むのが素直な読み方であろう。

宇野はここで、その後の資本主義は従来の宇野の段階論が適用可能な資本主義だという結論に達した、と読むことができると私は考えているが、人によっては、54年時点の疑問、迷い、は正しかったのであり、その後の資本主義は従来の段階論にはなじまない、過渡期としての資本主義だという結論に達したのだ、という読み方があるのかもしれない。宇野派の私と同世代の研究者の中にも、宇野は第一次大戦で段階論を打ち切ったと理解している人もいるのである。

しかし、この読み方には無理があると私は思う。宇野は、たとえば[1967-1]の中で、「いわゆる国家独占資本主義は、段階論的にはどのように規定されるか」という「問題」に対して、次のように「解答」している。長くなるが、全文引用しよう。

「段階論的規定は、商人資本・産業資本・金融資本の3つの資本の型を基準にして与えられるのであるが、いわゆる国家独占資本主義が、この資本の型に対してとくに新たな資本の型を展開するものとして規定されているとは考えられない。したがって段階論的には、金融資本をもって十分に分析されるものではないかと思う。ただ第一次世界大戦後はロシア革命によるソヴィエトが出現し、第二次世界大戦後は中共その他の共産圏の拡大によって、もはやたんなる資本主義の帝国主義時代とはいえない関係を展開しているし、また政

策にも、たとえば対内的にはインフレ的財政投融资が重要となり、対外的には援助政策など新しい方策がとられてきたので、これを従来の金融資本の段階論的規定に入れて考察することが困難となったために、国家独占資本主義の時代というようなことがいわれるようになったのではないかと思う。しかしもともと、段階論的規定は、現状分析にさいして、そういう機械的適用にあてられるべきものではない。それは原理論の抽象的な基本的概念を持って現状を分析するという場合に、その前提をなす純粹の資本主義社会が分析の対象をなす現状とはつねに異なっているために必要とされる、いわば補助概念をなすものであって、たとえば現実の資本を原理論の資本概念におしこみえないのと同様に、段階論的概念を持って現実の資本をかたづけるわけにはゆかない。ただ原理論の基本的規定で明らかにしえない面を段階論的に歴史的な概念をもって補足的に解明されると、現状の特殊性が科学的に明らかになるというわけである。国家独占資本主義というのは、そういう点から段階論的に新しい時代というよりは金融資本段階の一時期とでも考えるべきではないかと思う」 ([1967-1] p17~18。宇野[1973] p182~3 に再録)。

ここには四段階説ないし三段階半説としてのいわゆる国家独占資本主義と宇野の三段階論との関係についての宇野の考えが明確に述べられているとあってよい。これをみる限りでは、おそくとも 1967 年の時点では、明らかに 54 年段階の疑問は吹っ切れていると見てよいだろう。以上はとりあえず、現代と 3 段階論の関係についての私の宇野理論解釈を述べたにすぎない。この宇野理論が正しい議論かどうか、とくに 21 世紀の現代を 3 段階論でどう考えるかはまた別の問題である。

以上が、拙稿「宇野弘蔵の〈過渡期〉説について」の少し詳しい要旨である。

なお、小幡が、第 3 節の最後 (p254) で、40 年前の私には「世界がどのよう現前していたのかを、明快に語ってみるべきである」といい、また「山口氏の目には 20 世紀の社会主義がどう見えていたのか」を聞いているので、「明快に語る」自信はないが、一応、ごく簡単に答えておこう。

40 年前というと、1970 年代半頃であるが、ポイントの一つは当時、社会主義への「過渡期」であると考えたことがあるかどうかであろう。私は当時の眼前の世界をそのように認識したことは全くない。もちろん、私に世界の政治情勢や経済情勢に十分知識があつての上のことではないので、単なる印象についての記憶であるが、まずに日本について言えば、私が中学 1 年の時に敗戦。大学 2 年の 1952 年にいわゆる皇居前のメーデー騒乱、という時代だったので、その頃は、革命前夜の霧気がないではなかったが、その数年後には朝鮮戦争後のいわゆる米ソ冷戦体制に対応して、我が国でも 55 年体制といわれる保革共存の欺瞞的な安定的体制が成立する。その後は 60 年安保前後から、革命運動とはとてもいえない反体制的の学生運動が時折盛り上がりを見せたが、その都度の挫折とそれに伴う運動主体の変質、転向、墮落、変節、を繰り返し見せられ、私は、革命というものにたいする期

待というものを殆ど持てなくなっていた。

また、世界について、世界史の年表をパラパラ見てみながら、思い出してみると、政治的には、1953年、スターリン没。56年頃からソ連内外の左翼陣営でスターリン批判が活発化し、政治的にも論壇・学会でも構造改革派が登場。50年代後半は平和共存が唱えられた時代であった。60年代はベトナム戦争の時代である。戦争は60年代を通して激化し、73年に米国の敗退で終わる。その間、68年には世界的に反体制的學生運動もあったが、日本でも世界でも体制を脅かすような運動にはならなかった。

その後の70年代はデタントといわれる時代になるが、実はソ連はその間、膨張気味で、軍事的にもソ連がやや有利な情勢であったように思う。しかし、それに伴って資本主義陣営では反共的な情報戦や第三国獲得競争が激化。また、社会主義陣営の側も必ずしも結束して資本主義陣営と対峙するという態勢ではなかった。70年代には米中が接近し、50年代末からあった中ソ対立がさらに激化することになる。これらを眼前にしていた私の気持ちからは社会主義はますます遠いものになって行った。

60年代に脚光を浴びた毛沢東思想は、その当時の私には思想運動として興味があり、期待もあった。墮落しつつあるソ連社会主義に対するアンチテーゼとしての一縷の望み、救いのように思ったこともあった。しかし、それも、文化大革命が悲惨な結果に終わり、中国も70年代後半から改革・開放への道を歩み始めるようになって、資本主義との対立感が希薄化していく。

眼前にこのような世界が展開されていたのでは、とても過渡期という実感が持てなかったのも当然とはいえないか。こうやって振り返って見ると、要するに、私は小幡の世代と違って、高揚の経験が全くない時代、淡い期待が生じることがあっても、直ぐしぼんでしまった時代、に生きていたとってよいだろう。もし辛うじて過渡期に似たような時代があったとしても、私の大学前期の頃、つまり敗戦後6、7年くらいの1951、2年頃までであった。

「四 典型と類型」の検討に進もう。

この節は、宇野の帝国主義段階論に対して小幡が「ドイツ＝典型説」という定式化をしている意味を問うた私の文章の引用から始まる。すなわち、小幡が「そこ [グローバリズムの現実] には、ドイツ＝典型説の再現に還元できない世界が広がる」(小幡 [2008] p84) といっているのに対して、私には「[小幡が]〈ドイツ＝典型説〉ということでは何が言いたいのか、よくわからない」が、私の宇野解釈では、「19世末から20世紀初頭にかけてのいわゆる帝国主義段階における支配的な蓄積様式が金融資本的蓄積であり、金融資本の展開はドイツ、イギリス、アメリカに見られたが、それが典型的に展開されたのがドイツ資本主義においてであったというのが〈ドイツ＝典型説〉なるものの一つの意味であろう」(山口 [2010-1] p156) と述べた。これは宇野解釈として述べたものだが、これに対して小幡

が、「よくわからない」といっておきながら「ちゃんとわかっているのではないですか」といっているのを見ると、小幡は私の宇野解釈を小幡解釈と勘違いしているらしい。

小幡はそこでは、この「ドイツ＝典型説」という定式の意味を定義しないで使っていたので、他の場所での使い方を参照して推論するしかなかったが、たとえば、「先行するイギリス資本主義を前提に、独自の資本主義化を遂げたドイツが、それに代わって支配的な型となると見るドイツ＝典型説が、宇野の帝国主義論の核心となる」、「ドイツ＝典型説と原理＝純粋資本主義説は双対をなしている」、「ドイツ＝典型説はまた、資本主義の部分性という認識につながる。…内的不純化と外的部分性、これがドイツ＝典型説から導出される帰結である」というような使い方がされている。このような「ドイツ＝典型説の再現できない世界」、あるいは再現できる世界というのはどういう世界のことかがよく分からなかったのである。しかし、小幡は自分の「ドイツ＝典型説」の意味は、金融資本的蓄積が「典型的に展開されたのがドイツ資本主義においてであった」という「典型」の意味についての私の宇野解釈の「とおり」([2012] p255) だという。つまり私が解釈した宇野と同じだというわけである。しかし、そのあとの論述を見ると、どうやら「典型的」という言葉を使っていることが同じだというだけで、小幡によって「典型」という言葉がどういう意味で使われているのかは、この限りでは依然分からない。

私が [2010-1] で、宇野の〈ドイツ＝典型説〉なるものについて小幡が解説している文章（小幡 [2008] p84）を引用した際、その一部を「…」と点線で省略したことを取り上げ、小幡は「それでは [そこを省略したのでは、ということだろうー山口] 〈典型〉の意味がわからなくなるのも無理ない」と「嘆いている」([2012] p256)。私が省略したのは「先行するイギリスと同じ道を早足で歩んでキャッチ・アップするのではなく」という文章である。この文章に「典型」の意味を解く鍵があるというのであろうが、それは何なのか。

それに直ぐ続けて、「各国をフラットに並べて、空間的な多様性を問題にする山口氏は〈典型〉という考え方にもともと関心がないようで、たとえば〈宇野は金融資本の諸相としてドイツ金融資本、イギリス金融資本、アメリカ金融資本の三類型を取り出したが、これは同時に、当時の世界経済編成の多極化の様相を示すものとして解読できるものであった〉とさりりという」と述べているところを見ると、ヨコの相違ではなく、もっぱらドイツのタテの歴史的発展の仕方の特質に「典型」の意味を求めているのかも知れない。さらに続けて、小幡は宇野が『一橋新聞』での佐藤金三郎、高須賀義博らを聞き手とする対談で「典型」について発言している文章を引用（同上 p256~7）して、「宇野は〈ドイツとイギリスとにその金融資本の相違が認められるにしても、いずれが典型的であるか〉を問題にしている」（同上 p257）のであるといい、「資本主義の段階的発展と変容に関心を寄せる小幡にとっては、歴史的な時間の流れの中で生じる〈典型〉の交替が重要な意味を持つ」（同上）のだという。

これに続いて小幡は、私に宇野解釈を確定し、私の類型論を「積極的に」論じることを

要求している。たとえば、宇野 [1958] の中の一文を引用して、「山口氏のいうようにただ〈三類型を取り出した〉というのではなく、宇野は〈ドイツとイギリスと…いずれが典型的であるか〉を問題にしているのだ」(小幡 [2012] p257) といい、引用した宇野の文章に「〈典型〉という用語の多義性が露呈している」が、この「多義性を排した命題に定式化し、その真偽あるいは適否を」「吟味してほしい」(同上) という。

また、私が小幡を批判した山口 [2010-1] において、世紀末以降のグローバリズムは「ドイツ＝典型説の再現に還元できない世界」(小幡 [2008] p84) だという小幡の発言に対し「当時のドイツ資本主義が再現されないのは当たり前の話であるが、当時のドイツ的特徴を捨象したような一般的な金融資本的蓄積様式の理論を現代の資本主義の理解に適用できないかどうかという問題は考えてみてもよい問題であろう」(山口 [2010-1] p156~7) といったのに対し、小幡は、宇野 [1967] の中の次のような一文を引用する。すなわち、「いろいろな国の帝国主義的傾向をつかまえて、その中から抽象すればよいのではないかと、こういうふうに考えられるが、そうはいえないのではないか」。そして、私が「一般的な金融資本的蓄積様式の理論」といったことに対し、「宇野が避けようとしたアプローチを自説として唱えているように見える」といって、私に対する要求として、「山口氏独自の〈類型〉論の意義を積極的に論じてほしい」「〈宇野批判〉は山口氏の〈類型〉論のためにも、避けて通れないところなのではないか」(小幡 [2012] p258~9) といっている。

そこで、これらに対する答えも含めて、小幡の議論の検討を進めていこう。

「典型」という概念を用いる場合には、ヨコの複数の国のうちの「いずれが典型的であるか」が当然問題になる。「発展と変容に関心」がある場合は「典型」の交替が問題になるのかもしれないが、その場合にも、ヨコの構造の変化が「交替」を生じさせると考えられるから、「交替」を問題にするための前提作業としても、複数の資本主義国のヨコの比較が必要であろう。「いずれが典型か」という問題にせよ「典型の交替」という問題にせよ、ヨコの諸資本主義国との関係が考察された上で、「典型」国が選ばれるのであろう。そこで問題になるのは、「典型」選択の基準、つまり「典型」とは何か、である。

先に宇野説についての私の解釈を紹介したときに「典型的」という言葉を使ったが、それは、宇野の口真似をただで、小幡のいわゆる多義性のある宇野の典型概念の本当の意味は実は私にはよく分かっていない。『経済政策論』の序論を読んで、ウエーバーの影響を受けた概念であろうと思い、難解な『マックス・ウエーバー社会科学方法論』を読んだり、私の前の世代の「典型」という概念に特に関心の強かった鈴木鴻一郎、中野正、武田隆夫らの意見を聞いたり、同世代の戸原四郎らと議論したり、もちろん宇野に直接尋ねてみたりもしたが、結局、納得できる理解に到達することは出来なかった。

また、「典型」解釈に何かアイディアをえようと思って、東大の定年が近くなった頃の数年間だったと思うが、宇野派の段階論者数人の諸論稿や座談会をコピーし、大学院の演習で議論して貰ったこともある。宇野派の論者の論考の中に、宇野は第一次大戦までで段階

論を打ち切っている、つまりそれ以後は過渡期として現状分析論の課題だといっている、という議論があったので、私はそれに異議を唱えたが、参加していた院生ないし院生 OB から余り賛同を得られず、慚然たる思いをした記憶がある。

これらの過程をとおして、私の中でいろいろな考え方の試行が行われた。まず、「典型的」の言い換えとして、たとえば、「代表的」、「模範的」、「指導的」、「支配的」、「積極的」、「攻撃的」、「基軸的」などを考えてみたが、その中で私は、今のところ、段階規定については「支配的」、金融資本段階内については、「基軸的」という言い換えを使うことにしている。「基軸的」というのは、複数の基軸国の存在を許す用語であり、また複数国間のタテの交替がヨコの一極集中にならない場合を示すのにも適した用語だと思っているからである。「典型」という用語は一国という意味を内包しているであろう。しかし、資本主義の「不純化過程」、いわゆる古典的帝国主義段階とそれ以降、になると、世界経済の基軸は多極化する。産業軸と金融軸、あるいは攻撃的基軸と防衛的基軸、覇権国としての主軸と衛星国としての副軸、などが分かれる。ここでは一国を想定させる「典型」という用語は使い難い。

次に、「一般的な金融資本的蓄積様式の理論」の問題であるが、宇野は確かに「いろいろな国の傾向」を抽象して一般的概念を構成することに疑念を述べている。宇野の『経済政策論』第三編「帝国主義」の第一章「爛熟期の資本主義」は、第二章「金融資本の諸相」の前に位置していて、置かれている場所から見れば金融資本の一般的概念規定をしていると見ていい個所であるが、その叙述はもっぱらドイツの具体的事情を材料にしたものであり、イギリス金融資本なりアメリカ金融資本なりの金融資本を規定する要因は含まれていない。

しかも、そこでの金融資本規定にはドイツのいろいろな固有名詞が残っており、一般化された叙述になっていないにもかかわらず、つづく第二章の「諸相」論で、もう一度ドイツ金融資本の考察をしているのであるから、第一章はドイツによって金融資本の「典型」規定をし、このドイツによる「典型」規定をもって金融資本の一般的規定としていると見ることができるであろう。しかし、そのようなドイツに偏った金融資本規定では、諸相を分析するための一般的基準とはなり得ないのではないかというのが私の長年の疑問の一つであった。ドイツだけでなく、イギリスも、アメリカも、フランスも…参考にできる金融資本の行動様式はすべて材料にしてよいのではないか。要するに、ドイツの特徴を捨象したような、あらゆる材料から抽象したような概念、というのが、とりあえずの（＝他にいろいろ言うべきことはあろうが、とっさに頭に浮かんだ）「一般的」の意味である。

小幡（[2012] p256～7）もその一部を引用している宇野の文章に「僕自身としては、ドイツの場合にはその金融資本が国内の生産過程に直接的に基づいて形成せられた点に、その基本的規定を与えられるものとしたのですが、それは金融資本を単なるレントナーの資本にするのは、余りに一面的であると考えたからです。しかしこの点は、なお攻究を要す

るものと考えています」(宇野 [1958] p206、宇野 [1974] p147) というのがある。これに対して私は、「金融資本を単なるレントナーの資本にするのは、余りに一面的である」のはもちろんであるが、ドイツによって基本的規定を与えるのも一面性があるのであって、両面を兼ね備えたような、あるいは地域的固有性から抽象されたような一般的概念が有用なのではないかと思っているわけである。

最近の私は、金融資本の一般的概念の規定を次のように考えている。

現代も金融資本段階の一段階だというためには、従来の金融資本規定を見直さなければならぬ。従来の規定で金融資本として概念されていた金融機構は、要するに産業金融の機構であった。重化学工業の独占的大資本に対する金融にせよ、信用銀行という商業銀行と証券会社の兼営銀行による固定資本金にせよ、産業金融の機構である。それに対して、現代の、とくに米国型の金融資本に特徴的な金融は、証券金融である。すなわち、その金融には迂回的、間接的には産業に対する金融も含まれるにせよ、公的機関に対する金融や消費者に対する金融など、様々な種類の収益をもたらす金融取引を証券化した様々な証券の売買に対する金融が含まれるのであり、このような金融を行う資本を、産業金融を行う金融資本と区別して証券金融資本と名付けることにする。証券金融資本も金融資本の一種であるというのであれば、それは、産業に対して迂回的な、表層的な金融機構も金融資本と概念するということであるから、産業金融にも証券金融にも共通するような金融資本概念を考えなくてはならない。それは何かというと、まずは、貨幣融通資本形式の資本ということになる。

原理論の流通論では、資本形式論で貨幣融通資本形式の資本の行動様式を論じるが、それには出資方式と貸付方式と証券投資方式の三方式の運動があることを論じる。諸資本が社会的生産を編成する過程を考察する競争論での、産業資本相互の商業信用、銀行信用と銀行資本、結合資本としての株式会社の資金調達＝資金融通関係、証券業資本による資本証券と貸付証券に対する金融は、諸資本の競争過程でのこの貨幣融通資本の現実化したあり方である。

段階論的類型論での金融資本とは、この現実化した貨幣融通資本が、資本主義の発展段階と展開地域とによって相違する役割を果たしている銀行信用機構なり投資銀行機構のことであると概念するならば、現代も金融資本が支配的な資本蓄積様式の段階であるということが出来る。段階と地域によってさらに具体的な考察をしようとするためには、この金融資本の一般的概念を構成する諸要因のどれが、段階と地域によって特殊的に肥大化するかを確かめるという作業が行われることになる。

未だ十分考え尽くしたものではないが、ほぼ以上が、小幡に要求された私の金融資本段階についての「積極」説の一端である。私はこれまでも多くの点で宇野批判をしており、この積極説が宇野批判になるとしても私としては一向に構わない。ただ私の宇野批判は、宇野がマルクスにしたように、宇野が求めたものを求める、宇野によって宇野を批判する

というスタンスで行うことを目標にしている。これが私の宇野解釈と宇野批判の「心構え」である。その結果として、私もマルクスによってマルクスを批判し、マルクスが求めようとしたことを求めていることになると思っている。私にはその範囲を出る心算はないし、その能力もない。

未だ十分考え尽くしたものではないが、ほぼ以上が、小幡に要求された私の金融資本段階についての「積極」説の一端である。また、類型論の意義についての説明も要求されているので、熟したものではないが、それについても今考えていることを簡単に述べておきたい。

私は段階論的な類型論とは、時代的、地域的特殊性・個別性から抽象された原理論＝純粋資本主義論を、現実の資本主義の分析にとって有用な基準理論にするための媒介的な中間理論であると考えている。抽象的な原理論を現実分析に利用するためには、直観的には、あるいは常識的には、純粋資本主義の基底的な存立条件である再生産過程を円滑に進行させるために展開される諸市場機構に対して、時代的・地域的に相違する特殊・個別的な存立条件や特殊・個別的な市場機構を投入して生じる変容・偏倚を観察することによって、現実の資本主義像を再構成するという方法が考えられるであろう。しかし、このような方法では、現実分析の手続きは無数の極めて多様なものとなるであろうし、また、その分析結果は、個々の問題についての分析結果の間の有機的関連が見えにくいという意味で、その有用性はかなり限られたものになると思われる。経済的諸問題は全体の経済の中で互いに有機的関連のあるものとして存在しているものであり、孤立した存在ではないからである。

それでは、特殊・個別性を個別的に投入する方法とは異なる何か別の方法があるとするれば、それはどのようなものであろうか。現実の資本主義の地域的・歴史的・特殊・個別性は、その資本主義を構成する経済、政治、文化等々の地域的に、あるいは発展段階的に、特殊・個別的な要因の集合であるといつてよいが、それらの諸要因はある地域、ある時期に偶然に存在しているというよりも、一定の社会的、歴史的、あるいは地政学的な根拠を持って存在していると見てよいであろう。別の言い方をすれば、ある現実の資本主義総体の特殊性は、構成要素のバラバラな、偶然的な特殊性を単に寄せ集めたものというよりも、資本主義の発展段階なり地域なりの特殊性に規定されたあるまとまった特殊性の集合であるとみるべきものであろう。このように考えられるとするならば、それぞれの構成要素の特殊性を純粋資本主義に投入してその偏倚・変容を考察するにしても、それらを個別的、直接的に投入するのではなく、ある幅と厚みをもったいくつかの要素から成る特殊性の集合体を取り出し、その特殊性を規定しているもっとも規定的な要因を基準にしてその特殊性の集合体を類型として構築し、それを媒介にして現実の資本主義の特殊・個別性にアプローチするという方法を考えた方がより有効であるということになる。

このように考えると、作業の第1段階として、とりあえずは資本主義の歴史的発展の過

程をいくつかの段階に分けて、それぞれの段階での全体的な経済の類型を取り出すという作業が必要になる。その場合、その特殊性の集合としての類型を分類する際の積極的な基準になるのは、その束を構成する諸要素の中で類型の特殊性を規定する最も基底的なもの、最も重要なものとしての支配的な資本蓄積様式であると考えることが出来よう。この支配的という意味は、それぞれの段階の世界資本主義の基本的性格を規定するような主導的影響力を持った資本蓄積様式のことである。

次いで必要となるのは、各段階で変容する世界経済の編成構造の中からさらにいくつかの類型を取り出すことである。上述のような段階的類型論には、支配的資本の蓄積様式の類型の他にもう一つ世界経済の編成構造ないし枠組みの類型という基本的規定要因があると私は考えている。この二要因の関係については、まず、資本主義の世界史的発展段階を積極的に規定する要因を支配的資本の蓄積様式に求め、それによって商人資本、産業資本、金融資本の蓄積様式に主導される商人資本段階、産業資本段階、金融資本段階という主要三段階を区切る。その上でさらに、世界経済の編成構造という消極的要因によって、この主要段階の中をさらにいくつかの副次的段階に分けてその特徴を類型化する。たとえば15世紀から19世紀にかけての商人資本段階についてはスペイン・ポルトガルによる世界編成の段階とフランス・オランダ・イギリスによる世界編成の段階、19世紀中葉の産業資本段階についてはイギリスを単一の基軸国とし、その周辺にフランスやドイツ、アメリカなどの後進的な資本主義国と農業地域が配置されていた世界編成の段階とその前後の移行段階、19世紀末から現代までの金融資本段階については、19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツ資本主義を積極的(=攻撃的)基軸とし、イギリス資本主義、フランス資本主義、アメリカ資本主義等が防衛的基軸として配置されていた多極的編成構造、20世紀の20年代、30年代は米国を主軸とし、その他の複数の副軸国(英・仏・独・日)とソ連社会主義圏が配置されていた多極的編成構造、第二次世界大戦後の20世紀後半は米ソ共存を基軸とする冷戦構造という2大陣営の対立構造としての世界編成構造、冷戦終結後は米国によるごく短期的な単極体制のあと、21世紀に入り、現在の中国市場経済の発展を取り込んだ米・欧・アジアの3極を基軸とする多極化構造への移行過程、といったいくつかの副次的段階にわけて、それぞれにおける支配的資本の相異なる行動様式の特徴と世界経済の枠組みとを類型化して考察するというアプローチを考えているわけである。

この場合、世界経済の編成構造ないし枠組みは、各支配的資本が活動する場ないし条件の性格を規定し、その行動様式に影響を与える要因になるという点で、段階を規定する重要な要因ではあるが、経済学的には主役はあくまで支配的資本であって、構造ないし枠組みはその活動の舞台を提供する役割を果たすに過ぎないものと位置づけることが出来る。

まだ素描であるが、私は段階論的類型論をほぼ以上のように考えている。

見られるように、素描であるから極めて不十分なものではあるが、私としては、別に三類型を「さらりと」(小幡[2012] p256)並置しているだけという考え方をとっているわけ

ではないことは了解されよう。

「五 起源の二重性」を検討しよう。

この問題は、小幡が「資本主義の起源に関しては、『資本論』に二重の規定が含まれていることはよく知られている。(1) 商業革命をベースとした規定と (2) 産業革命をベースとした規定である」([2008] p78) とした上で、マルクスについて、「『資本論』はそのコアにおいては、…商業的發展は…資本主義の原理像から排除する」(同上 p79) と言い、また宇野についても、「宇野自身の資本主義像では第二の起源がその根本をなしている」(同上) といっていることに私が疑義を感じ、便宜上、(1) を流通主義、(2) を「生産主義」と名付けて、小幡が「マルクスないし宇野理論をあえて〈生産主義〉だと決めつけている」と抗議(山口 [2010] p149) し、また「そもそも流通主義と生産主義を二律背反的、二者択一的な起源論だと見て裁断」を下していることに疑問を提起した(同上) ことに関するものである。

小幡は、これに対し、まず「もともと起源の二重性を説いているのに、〈マルクスないし宇野理論をあえて生産主義だと決めつける〉と逆に決めつけられたのでは、…応手に窮す」(小幡 [2012] p261) という。私には小幡が何を言いたいのか全くわからない。小幡は、「資本主義の起源に関しては、『資本論』に二重の記述が含まれている」として、マルクスが説いているという起源の二重性論を紹介し、そのマルクスの二分法を基準にしてマルクスの資本主義像説と宇野の資本主義像はそのマルクスの言う二重性の内の一方に力点が偏った議論だと決めつけた、と言ったのである。もちろん小幡自身が「二重性を説いた」としても同じことである。小幡が、マルクスの資本主義像はそのうちの一つを「排除」した像であり、宇野の資本主義像は他の一つが「根本」をなしている像だと決めつけと言ったことのどこが、応手に窮するほど論理的におかしいのか。

また、私が、小幡は「流通主義と生産主義を二律背反的、二者択一的な起源論だとみて裁断を」下していると言ったのに対し、「〈二律背反的〉なものの〈二重性〉というのは、得意の超論理学をもってしてもわからない」(同上) というが、これも同様、私には全く分からない。マルクスは「二重性」をもちろん二律背反的なものとして認識していたのではないと思う。それを小幡が二律背反的なものとして扱っていることを咎めたのである。この論理は「普通の論理学」をもってすれば分かるはずであるが、「超論理学」には理解できないのであろうか。

なお、私がそこで使った「決めつけ」という言葉は、別のいいかたをすれば「断定」とか「断言」といってもよいが、とくに「決めつけ」と言う時のニュアンスとしては、根拠ないし典拠が示されていない、あるいは示されている根拠ないし典拠に問題がある、ということと言外に言いたい時に私は使っている。だから、「応手に窮」していないで、とりあえず根拠ないし典拠を示してほしい。

さて、小幡は、先の「超論理学」では分からないという話にすぐ続けて、まず、自分は「(1) 歴史的な起源論と (2) 原理的な資本主義像を区別して、(2) のレベルで、いずれが〈根本〉をなすかを論じている」（同上）のだという。歴史的な「起源の二重性」の問題をマクラに使ったけれども、実は「原理的な資本主義像」を問題にしているのであり、その「原理的な資本主義像」のレベルでは、歴史的な起源論のレベルと違って、「流通主義的」な原理像と「生産主義的」な原理像のどちらが「根本」をなすかを論じるために、その二つを二律背反的、二者択一的に扱うことが必要なのだということであろうか。

そして、つづいて、私が「流通主義」と「生産主義」について「両者は一体となって相互補完的に起源をなすと見ていたのがマルクスないし宇野の起源論である」（山口 [2010-1] p149）と言ったのを取り上げ、「(1) のレベルで言えば、併存する以上、何らかの関係はあるものだし、〈補完〉はたいてい〈相互的〉なものに決まっている。しかし、(2) のレベルで、原理像を構成しようとする〈相互補完的〉ではすまない。どちらが〈根本〉をなすのかがつねに問われる。商業資本と銀行資本は現実には〈相互補完的〉だろうが、そのうちどちらを先に説くべきか、こうした思考法を若い頃からたたき込まれてきた小幡のような原論研究者にとって、〈両者は一体となって相互補完的〉というだけではどうにも気がすまない」と言う。

しかし、私はこの原理像の捉え方には疑問がある。ここで小幡が言う「根本」とは何なのか。例えば、小幡が例に出している商業資本と銀行資本との関係の論理的な先後関係を考える場合の「根本」、ないしそれに当たるものは何なのか。先行するものが根本だと思っているのか、後行のものが根本だと思っているのか。

私は、「相互補完」という捉え方が好きなので、つい使ってしまう。政治とか思想の場では対立が明確でなければならないかも知れないが、理論の場では、複数の要因について、あちらを立てればこちらが立たぬというような二者択一的な捉え方では、真理を捉え損なうのではないかと思っているのである。「相互補完性」といういいかたでは「併存」的なニュアンスがあって問題があるとすれば、ここは「重層性」という言い方でもよい。このように言い換えると、これなら原理像でも使えそうではないか。そして重層性という言い方は、二重性と近い言い方だといってよいから、二重性も原理像で使えそうだとすることにもなる。

回りくどい言い方は止めて、具体的な問題で言おう。資本主義においては、歴史像でも、原理像でも、「生産」と「流通」は二重に存在している。相互補完的に、あるいは重層的に存在している。原理論での問題は、それをどのような順序で、つまり、どのような体系構成によって説くかと言うことであって、どちらが根本かという問題ではないのではないか。歴史形成体として、つまり市場経済の発生以降の資本主義的生産の発展の過程で、出来上がった資本主義経済の像を、理論化して、つまり原理像として措定する場合に、一つの方法として、「生産」と「流通」の相互関係ないし重層関係を原理論の篇別構成で示すという方法がありうるであろう。例えば、マルクスは、周知のことであろうが、三巻構成の『資

本論』において、「生産」を前提しない「流通」を第一巻冒頭の第一篇と第二篇として説き、第三篇以降と第二巻とで「流通」によって処理される資本主義的再「生産」過程を説くという方法をとっている。そして、第三巻では、流通と生産によって相互媒介される諸資本の相互関係としての競争の過程と機構とを考察するという方法をとっている。宇野はこの方法をさらに明確化し、『資本論』では第一巻「資本の生産過程」論内部の第一、二篇として篇別構成されていた生産の外部における流通世界の商品、貨幣、資本の問題を、第一篇「流通論」として括りだして独立させる篇別構成を提起した。そして『資本論』第一巻の第三篇以下と第二巻「資本の流過程」を一括して第二篇「生産論」とし、第三巻「資本家的生産の総過程」に対応する部分である第三篇「分配論」を「流通論」と「生産論」の統一と位置づけた。つまり、『資本論』における「資本の生産過程」、「資本の流過程」、「資本家的生産の総過程」というトリアーデに対して、「流通論」、「生産論」、「分配論」という新しいトリアーデが提起され、「流通」は「正・反・合」の「正」の位置、つまり「資本家的生産の総過程」の積極的規定要因の位置に置かれたわけである（拙稿「宇野弘蔵と『資本論』」山口 [1983] p61～4 を参照されよ）。

このような理論体系構成に現れている宇野の資本主義観を説明する際に、私が「宇野理論が生成当時から主流派から流通主義と呼ばれたこと」とか、「流通浸透視角だと表現した人もいた」、という話を挿入した（山口 [2010-1] p149）ことに、小幡はクレームを付けている（小幡 [2012] p 263）。この二つの話は別に、ここのパラグラフで示した宇野の資本主義観の論拠として述べたわけではない。日本のマルクス経済学の論争史に不案内かも知れない読者に参考になるエピソードかなと思って書いただけのもので、いわば読者サービスのつもりのものであるから、思えばこれは余計な話であった。この二つの話の挿入のない文章だけでよかった。

そこで、この二つの挿話以外の部分で論じたことに対する小幡のコメントの検討に移ろう。小幡は、私がそこで「宇野は、マルクス同様、十六世紀から十八世紀にかけての商人資本の活躍による世界市場の展開がイギリスに世界貿易の生産拠点を確立したことによって、イギリスを中心とした資本主義世界が生成したという歴史認識を持っていた。ヨーロッパの中で封建制が比較的脆弱であったイギリスに流通関係が浸透して行ったことによって、労働力の商品化が促進されたと見たわけである。…この資本主義認識は、理論体系の問題としては、原理論において流通論を生産論から独立させた点に現れている」（山口 [2010-1] p149）と言ったことを引いて、「[これが] 山口氏の宇野解釈ととるほかあるまい。だが、このような山口氏の解釈は、どうも小幡が読んできた次のような宇野のテキストに符合しない」（小幡 [2012] p263）とあって、岩波全書版 宇野『原論』の次の文章を引用する。

「資本の産業資本的形式は、商人資本的形式や金貸資本的形式と異って、資本形態がいわばそれ自身で展開するものとはいえない。この形式のいわば基軸をなす労働力の商品化は流

通形態自身から出るものではないからである。勿論、資本としてはこの形式を展開しなければ、生産過程を把握しうることにはならない、したがってまた資本主義社会を実現するということにもならない。しかし、労働力の商品化の基礎をなす、生産手段を失った無産労働者の大量出現は、資本主義に先立つ封建社会自身の崩壊によるものであって、いわゆる単純なる商品生産者としての小生産者が、商品経済によって分解されて生ずるというというようなものではない。商品経済の発展は、ことに商人資本によって、また部分的には金貸資本によって、小生産者を分解し、その社会的関係を破壊する傾向を常にもっているのではあるが、しかしこの小生産者の分解は、どこでも、またいつでも近代的無産労働者を出現せしめるとは限らない。現に、十六、七世紀以来の西欧諸国における商品経済の発展も、イギリスにおいて始めて資本主義を発生せしめることになったのである」(宇野 [1964] p44~5 の注 (3))。

これはおそらく大塚史学流の小農民層の両極分解論を念頭においた注記であろうと思われるが、これと私の宇野解釈とがどう符合しないというのか。

小幡は、「ここ [この宇野の注—山口] でのポイントは、商品経済の浸透作用は社会的関係を〈破壊〉するだけで、労働力の商品化を〈出現〉せしめる力は持たない、という否定形の規定にあり、この背後には、資本主義は、商品経済外的なゲバルトによって土地と労働力が分離され、大量の無産労働者が出現することで成立したという肯定形の規定が隠されている」(小幡 [2012] p264) という。

社会的関係の「破壊」は「労働力の商品化」を含みうるので、厳密には「破壊するだけで」というところを「破壊する傾向を常にもっているが」に変えれば、私はこの小幡の宇野解釈に特に異存はない。問題はこれがどうして私の宇野解釈と符合しないのかである。

小幡は続けて私の宇野解釈に対して「〈流通論を生産論から独立させた〉のは、〈労働力の商品化は流通形態自身から出るものではない〉ことを示すためであって、〈流通浸透視角〉が流通論を生産論から独立させた〈理論体系〉に反映されている、というのは逆だろう」(同上) といっている。これも意味がよく分からない。

「労働力の商品化」のためには国家権力のゲバルトが必要だが、ゲバルトは流通形態自身から出るものではない。「流通論」の「生産論」からの独立はこのことを篇別構成によって暗に示しているといっただけだが、このことと、私が「資本主義の起源における流通の役割の重視 [という] 資本主義認識は、理論体系の問題としては、原理論において流通論を生産論から独立させた点に現れている」(山口 [2010] p149) といっていることとは「逆だ」というのは、どういうことなのか。宇野はこの注で流通関係の浸透は資本主義の起源ではないと言っているというのか。ゲバルトが起源だと言っているから逆だというのか。あるいは、私のように「流通の役割」を「重視」する認識はゲバルトが不必要だという議論だといいたいのか。つまり「流通の役割」を「重視」すると、「生産論」まで連続的に展開できることになり、逆に「流通論」を独立させない体系になるはずだ、といいたいのか。しかし、流通の役割を重視することと、ゲバルトの要不要とは関係はなかろう。

「流通関係の浸透」は労働力の商品化の前提条件であり、十分条件ではないが必要条件である。その意味では、資本主義の起源だといってよい。「流通関係の浸透」がいつでもどこでも労働力の商品化に結果するとは限らないが、イギリスでは、「流通関係の浸透」がゲバルトを要請し、無産労働者の創出を実現させた。しかし、ゲバルトは流通関係ではないから、それを流通論の中で、流通形態論の論理によって直接説くことは出来ない。そのことが、「流通論」の独立、つまり「生産論」との切断、分離を要請する。流通それ自体の中ではゲバルトの発動は説けないが、その直前までは説ける。労働力商品化の要請は示唆できる。これが私の宇野解釈である。

小幡は「逆だろう」と言ったあと、「これに対しておそらく山口氏なら、自分は〈労働力の商品化が促進された〉とだけいっているだけで、〈いわゆる資本の原始的蓄積〉を第一巻の最後においたことを高く評価した宇野に倣い、〈無産労働者の大量出現〉はこのイギリスに特有な原始的蓄積によると理解しているのだ、と反論するだろう。とはいえ、…両者に容認されたテーゼは、“歴史過程としてみると、商品経済の浸透は、小生産者を分解し、労働力の商品化を〈促進〉しはするが、〈労働者の大量的出現〉はそれとは別個の特殊歴史的な原始的蓄積の過程を通じて実現される。したがって、理論体系の問題としては、流通論では、産業資本の〈形式〉までしか説明できない。原理的に説明できない〈労働力の商品化〉を新たに導入して、生産論を独立させて説く必要がある”という、ほぼ同様な内容になる」(小幡 [2012] P264～5) という。

ここの「とはいえ」の意味はよくわからないが、それはともかく、先に小幡が引用していた拙稿 p149 の文章の主語は「宇野」であって、ここの文章は私の資本主義認識を書いたものではなく、宇野の資本主義認識を書いたものである。したがって、厳密には「山口氏なら、自分は〈労働力の商品化促進された〉とだけいっているだけで」というところを「宇野は〈労働力の商品化が促進されたとみた〉とだけいっているだけで」に変え、また、「宇野に倣い」を削除して、「宇野は、〈無産労働者の大量出現〉はこのイギリスに特有な原始的蓄積によると理解しているのだと解釈しているのだ、と反論するだろう」に変えるなら、ここの小幡による私の「反論」の代弁に特に異存はない。

ただ、私の反論を忖度してくれている説明を受けて、「両者に容認されたテーゼ」は「ほぼ同じ内容になる」といっているのをみると、結局、私の宇野解釈と小幡の宇野解釈のどこがどう符合しないのか私には腑に落ちない。出だしで「符合しない」というので、期待して読んでみたが、結局、「ほぼ同様な内容になる」ということになっていて、出だしでの期待は肩透かしを食って、竜頭蛇尾という感じで終わることになっているのは残念である。

そのあと小幡は、私が「私もいわゆる流通論次元で商業機構や金融機構をもう少し詳しく展開することは必要であるし、可能でもあると思っている」が、それは「従来の原理論の内容を多少微調整すればすむ話で、この点に関しても従来の原理論の見直しが必要であるというほどの問題であるとは思えない」(山口 [2010-1] p150～1) と言ったことに対し、

微調整にせよ「どう調整するのか、…斬新な一手を期待する」(小幡 [2012] p266)、「妙手をまちたい」(同上) といっている。

「微調整すれば済む」というのは、普通の日本語では、ほとんど「手」を加えなくてよいというニュアンスの言葉であると思うが、私は、多少は「手」を加えた方がよいかなど思っている。私の経済学には「妙手」などという派手なものはないので、派手好みの小幡の期待に応えられるとは思えないが、前々から考えていたこととか、若い友人達とかねがね話して合っていたことの一部を、いくつか思い出すままに書いてみよう。

流通論の世界をいくつかの地域(特殊な産業別の集積地域とか卸売商業あるいは小売商業の集積地域)に分け、例えば送金為替機構を説いてみる、あるいは運輸・保管の他に損害保険業を説いてみる、といったようなことを考えている。また、金融業に信託を加えてみるということも必要かなと思ったりしている。さらに、手形交換所とか証券取引所を説かないか、説くとすればどういう論理が必要かといったことも考えたいと思っている。また、以前考察したことがある商品市場取引の類型論(山口 [2008] p175~9)を整理・拡充することもしたい。しかし、これらのことは、仮に出来たとしても、従来の流通論の性格に「大転換」や「大変動」を加えるものではなく、その意味で微調整というべきものであろう。

他にも何か思い出すかも知れないが、いずれにしろ、流通が生産を担当する場合に便利な機構を、生産を前提にしないで、流通の要請だけで説けるものがあれば、予めできるだけ説いておくということを考えたおいた方がいいかなという程度のことである。

最後に、小幡は彼がこれまでどういう手直しをしてきているかの要旨を述べ、私との「論戦を期待」(小幡 [2012] p267) しているが、私は生来怠け者で不勉強なので、小幡のこれまでの手直しを殆ど読んでいない。瞥見の限りでは、またここで書かれている限りでも、論理も文章も難解で、かつ先行研究史との関係が断絶しているので、論戦しようにも私の理解能力をはるかに超えているとしかいいようがない。できればもう少し段階を踏んだ大転換をお願いしたい。少なくとも直接私の『原論』を批判してくれれば論戦になると思う。

6 解釈と批判

ここは「解釈」と「批判」に関する小幡の「心構え」や先行研究者に対する愚痴のような独白が殆どの箇所である。個人の「心構え」や愚痴にとやかく言うべきでないであろうし、私が直接批判されているわけでもないので、とくに私からリプライする必要はないように思われる。長文になってしまったが、小幡に対する私のリプライはこれで終わることにする。

宇野弘蔵 [1954] 『経済政策論』 弘文堂

宇野弘蔵 [1958] 『資本論と社会主義』 岩波書店

宇野弘蔵 [1964] 『経済原論』 岩波全書

- 宇野弘蔵 [1967-1] 『新訂 経済原論』（現代経済学演習講座）青林書院新社
- 宇野弘蔵 [1967-2] 『経済学を語る』東京大学出版会
- 宇野弘蔵 [1971-1] 『経済政策論 改訂版』弘文堂
- 宇野弘蔵 [1971-2] 「原理論の方法と現状分析」『情況』1971年5月号。[1971-3] 所収
- 宇野弘蔵 [1971-3] 『資本論に学ぶ』東京大学出版会
- 宇野弘蔵 [1973] 『宇野弘蔵著作集第二巻』岩波書店
- 宇野弘蔵 [1974] 『宇野弘蔵著作集第十巻』岩波書店
- 宇野弘蔵 [2008] 『《資本論》と私』御茶の水書房
- 小幡道昭 [2007] 「段階論から孤立した原理論—宇野原理論の問題点」
<http://www.gssm.musashi.ac.jp/uno/obata>
- 小幡道昭 [2008] 「純粋資本主義批判—宇野弘蔵没後30年に寄せて」東京大学『経済学
論集』第74巻第1号、所載。
- 小幡道昭 [2012] 『マルクス経済学 方法論批判』御茶の水書房
- 桜井毅他 [2010] 『宇野理論の現在と論点』社会評論社
- 山口重克 [1983] 『資本論の読み方』有斐閣
- 山口重克編 [1992] 『市場システムの理論』御茶の水書房
- 山口重克 [2006] 『類型論の諸問題』御茶の水書房
- 山口重克 [2008] 『現実経済論の諸問題』御茶の水書房
- 山口重克 [2010-1] 「小幡道昭の宇野理論批判」桜井毅他編『宇野理論の現在と論点』2010
年、社会評論社、所収。
- 山口重克 [2010-2] 「宇野弘蔵の〈過渡期〉説について」（「宇野理論を現代にどう活かすか」
Newsletter 第2期第2号、http://www.unotheory.org/news_II_2、所収）
- 山口重克 [2011] 「マルクス経済学の市場経済観と現代の市場経済」菅原陽心 [2011] 所
収。
- 菅原陽心 [2011] 編著『中国社会主義市場経済の現在』2011年、御茶ノ水書房